

日本古典における人間と環境－平安貴族とその周辺－プロジェクト  
『兵範記』データベースと12世紀京都の歴史地図

佐古愛己、上島理恵子、井上幸治、宮田敬三、杉橋隆夫  
文学研究科

**概要** 本プロジェクトでは、『兵範記』を素材として、院政期京都に関する様々な情報を発信することを目標としている。今年度の主な活動内容は、『兵範記』人名索引の作成とフルテキストデータベースの構築、および古記録の歴史的空間情報にGIS(地理情報システム)を適用した12世紀京都の歴史地図(『仮称:平安貴族の見聞地図』)の作成であった。本研究の特色は、日本史・史料学と理工情報系および地理学系サブプロジェクトとの共同研究という点にある。データベースの構築過程、GIS歴史地図の作成状況と古記録が有する情報のビジュアル化を図ることによって明らかになった点、さらに、このデータベースと地図を用いて今後進展が見込まれる歴史研究の方向を展望する。

Human and environment in Japanese history and classics –the Heian nobility and the surroundings–Project  
Hyohan-ki database and the historical map of the 12th century Kyoto

Aimi Sako, Rieko Ueshima, Kouzi Inoue, Keizou Miyata, Takao Sugihashi  
Literary Graduate Course

**Abstract:** As for this research project, we create the historical map of the 12th century Kyoto by using GIS(Geographic Information System) as well as the database which consists of the full text and the biographical index of Hyohan-ki, the diary of *Nobunori Taira*, who was the middle class aristocrat and practical bureaucrat during the *Insei* period(the late *Heian* period) .In this report, we introduce the above-mentioned content and the present situation of the research conducted jointly by Japanese history study, information study and geography.Furthermore, we would like to report the fruits of comprehensive research on the characteristic of spatial information in the old document and the structure of the aristocracy, which have emerged from the fusion of the database of Hyohan-ki and the historical map, and also point out some problems to be solved in the pursuit of this research project.

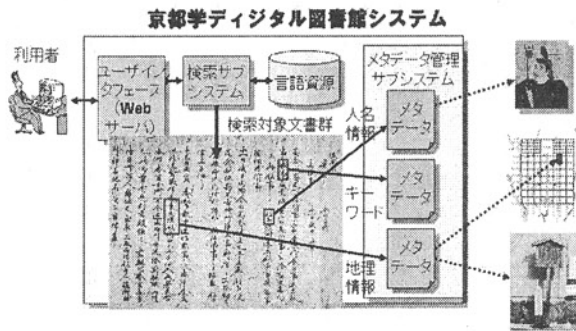
## はじめに

本プロジェクトの2004年度における主要な活動内容は、『兵範記』人名索引の作成とフルテキストデータベースの構築、および古記録の歴史的空間情報にGIS(地理情報システム)を適用した12世紀京都の歴史地図(『仮称:平安貴族の見聞地図』)の作成であった。これらの作業の進捗状況と

問題点、さらに如上のデータベースと地図を用いた歴史研究の展望と課題について報告する。

## 1、『兵範記』データベース

『兵範記』は、公家有職と行政の核心に通暁した院政期中級貴族・実務官僚、平信範(たいらののぶのり、1112～87)の日記である。彼が入手



(図1) 京都学デジタル図書館システム



(図2) 『兵範記』フルテキストデータベース

した有職・行政に関する精確かつ大量な情報は、当該期歴史研究の根本史料として重要視されているi。

『兵範記』は、信範の自筆浄書本が現存し、陽明文庫と京都大学附属図書館とに分蔵されている。唯一の刊本である史料大成本(以下、刊本)は、その解題によれば、自筆浄書本残存分はこれを底本とすると記されているものの、その信頼性への疑問は既に指摘されている(上横手雅敬「解説」『陽明叢書16人車記4』、思文閣出版、1987)。

本プロジェクトでは改めて浄書本(写真版)との照合を行い、刊本における誤植・誤読・脱漏箇所を検討した。その結果、部分的には明らかに自筆本によらず、他の写本を底本としていると推察し、2003年度の史料検索から、刊本は国立公文書館内閣文庫所蔵の『兵範記』(秘閣本、函号161-68)を最も主要な底本としている可能性が極めて高いことが判明した。

従って、良質のデータベースを構築するためには、刊本と自筆浄書本(陽明叢書『人車記』・京都大学史料叢書『兵範記』:影印版)とを厳格に校合した校訂本を作成し、これをデータベース化する必要がある。さらに、古記録に記される人名は実名の他に、時期によって変遷する通称(官職名)などで記されることが多いため、正確な人名検索を可能にするには、通称で記載された人物の姓名を確定する作業が必須である。本研究グループでは、上記作業を長年に亙り行っており、『兵範記人名索引』を作成している。既に活字媒体をもって公表済みの『兵範記人名索引』I・II・III

(『立命館文学』別巻、1987・91・99年)で採集した人名はのべ約6千人、データ件数は約3万件に及んだ。現在は、最終巻の作業を進めており、2005年度中に全5巻の索引を完成させる予定である。最終的な人名データは約5万件に上ると予想され、収録人物の解説を施した人名総覧の編集も企画している。

如上のデータベースの構築は、情報理工学部前田亮助教授のサブプロジェクト「京都学デジタル図書館」と共同で行っているii。『兵範記』をはじめとする古記録・古文書などの古典史料には、現在の文字コードに含まれない文字(「外字」)が多く含まれる。また、人名・地名・建造物名などにおける同一物の複数表記(呼称)が頻出する。このような特徴を持つ古典の電子化史料に対して、効率的な検索を行う手法、効率的な抽出方法を検討している。さらに史料文言に対する概念検索システムなど、古記録データベースに不可欠なアクセス手段の開発が求められる。現在は、OpenText7を利用した全文検索のデータベースを作成し、上記抽出方法や利用しやすい検索表示方法(全文表示・KWIC表示・ハイライト表示)などを検討している。今後、電子図書館システムInfoLibとの連携によって、メタデータ検索を可能にする。これにより、後述する歴史的空間情報に関する様々なコンテンツとのリンクが可能になる。

## 2、12世紀京都の歴史地図

### (『仮称:平安貴族の見聞地図』)

『兵範記』などの古典史料には、地名・建造物

名などの地理情報も膨大に盛り込まれている。既存の古記録データベースの多くは地名や建造物名などの文字抽出検索に限られ、歴史的空間情報が有効に活用されているとは言い難い。このような現状に鑑み、本研究では地理学教員河角龍典氏および「京都バーチャル時・空間」サブプロジェクトと連携して、近年飛躍的に向上しているGIS（地理情報システム）を、古記録の歴史的空間情報に適用することにより、12世紀京都の歴史地図を作成する。本プロジェクトは、同氏の要請に基づく史料の提供や12世紀京都の地理情報データベースの作成等を担当している。この地図と『兵範記』データベースとの結合により、古記録から得られる院政期京都の都市空間情報と政治・経済・文化的情報の有効利用が可能になり、様々な研究分野での活用が期待される。

### (1) 平安時代の地形景観復原図

12世紀の京都をできる限り詳細に再現した歴史地図の作成を試みる前提として、現在と異なる平安時代における平安京の地形景観を、埋蔵文化財発掘調査から得られる地質情報をもとに復原する必要がある。その復原方法・手順、土地利用図の作成過程、さらに平安京の地形と土地利用との関係についての考察は、河角氏の論文および口頭発表iiiで既に公表済みであり、詳細はそれらに譲るが、本プロジェクト研究との関わりにおいて、概略を以下に紹介する。

平安時代の地表面埋没深度の空間的分布を特定するために、本研究では平安時代の層位深度が判明している地点をGISにポイントデータとして入力し、その深度値を補完することによって平安時代の層位深度のラスターデータを作成した。

研究対象地域は、主に鴨川・桂川・右京地域の小河川（紙屋川・御室川）の流域から構成されるが、平安時代の層位深度の空間的分布は、鴨川流域で深度が大きくなる傾向がみられる。

1m以上の深度を持つ地域は、堀川通より東の地域に分布しており、深度が1.5m以上に及ぶ地域は、御池通と五条通、烏丸通と河原町通りに囲まれる地域を中心に広がっている。この中には、深度が2.0m以上に達する地域も含まれる。層位

深度は、鴨川から離れるに従い小さくなる。他方、桂川流域や右京小河川流域の層位深度は1m以下であり、鴨川流域と比較すると、相対的に浅くなっている。

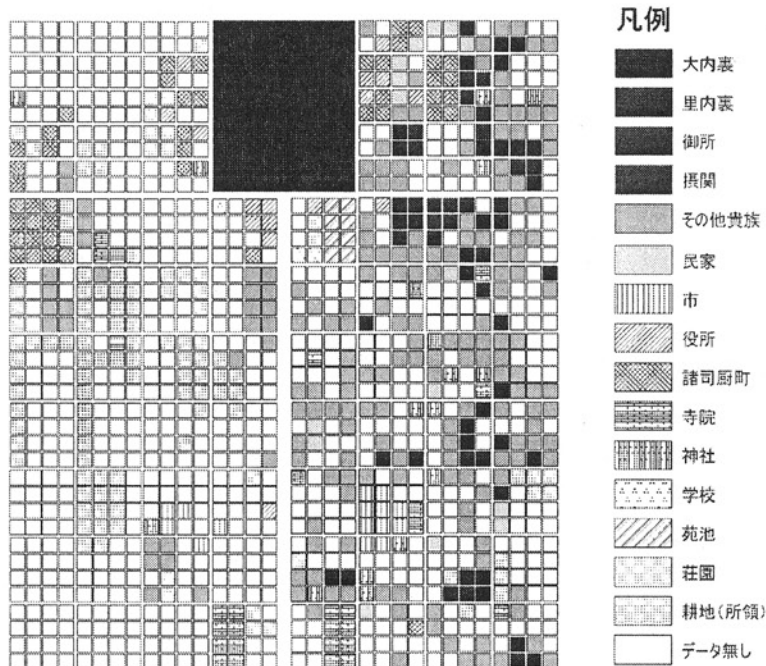
この結果を踏まえ、「現地表のDEM（デジタル標高モデル）」から「平安時代の層位埋没深度」を差し引くことにより、平安時代の地表の起伏を示すDEMを作成した。「平安時代のDEM」は、「調整済みの現地表のDEM」と比較し、左京地域で標高が低下している様子が理解できる。

### (2) 12世紀京都の地理情報データベースと土地利用図

京都に関する歴史学的、地理学的な研究成果は膨大な蓄積があり、代表的なものとして『平安京提要』ivや『平凡社日本歴史地名大系 京都市の地名』vなどがあげられる。これらの大量かつ精緻な研究成果のうち、本研究では、『兵範記』の記主平信範が存命した12世紀の京都に焦点を絞り、先行研究から得られる当該期京都の地理情報と、『兵範記』を解読して収集した建造物・地名などの地理情報をデータベース化した。今年度は平安京部分を対象に作業を行った。

まず、平安京データベースをGIS上で表示するために、データベースと平安京の街区ポリゴンを結合させる必要がある。平安京域の条坊は、全1136個の1町単位の街区と平安宮とから構成される。そこで、平安京の街区をGIS上でポリゴン化し、全1137個の街区に規則的にID番号を付け加えた。さらに、街區別に集計された平安京データベースにも同様のID番号を与え、それぞれの街区ポリゴンとデータベースとを結合させている。このようにして、平安京条坊「町」単位に前述の土地利用に関する属性を表示した。

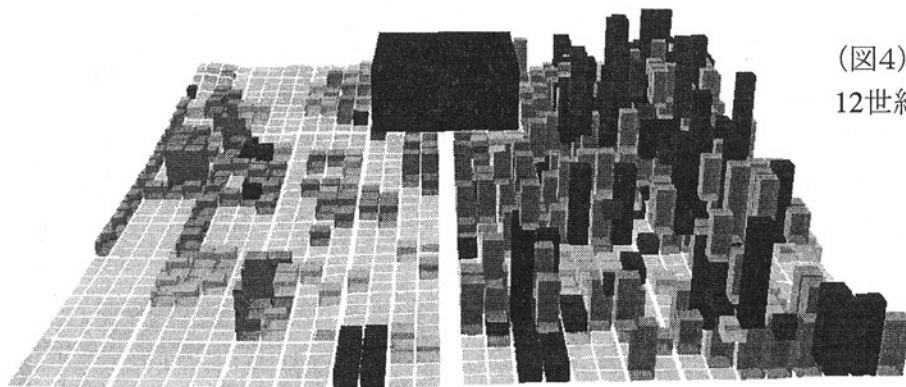
図3は土地利用状況を色分け（里内裏＝茶色：高さポイント5、院・女院・春宮・三宮などの御所＝赤茶色：4、摂関家邸宅＝赤色：3、その他の貴族の邸宅＝ピンク色：2、民家＝薄いピンク色：1、市＝黄色、役所＝黄緑色、諸司厨町＝緑色、寺院＝赤紫色、神社＝紫色、氏院＝水色、苑地＝エメラルド色、荘園＝オレンジ色、所領＝山吹色、利用状況未詳＝無色）で示し、これに高さを与え



(図3) 12世紀の土地利用図(平面)

地図データ例

| 所在    | 名称          | 建物<br>分類 | 主<br>主                          | 主分<br>類 | 身分               | 備考  | 典拠1   | 典拠2    |
|-------|-------------|----------|---------------------------------|---------|------------------|---|---|--------|
| 13301 | 東三条院(東三条殿)  | 邸宅       | 摂関家                             | b       | 摂関               | 藤原良房以来、代々摂関家が伝領。敷地ははじめ三条三坊の一町のみだったが、藤原兼家の時、南側の二町に東三条院院が設けられ、二町にわたる大邸宅となり、度々里内裏として用いられた。保元の乱時、邸敷を管領していた藤原氏春・左大臣藤原頼長らが敗北し、東三条院は後白河天皇方の手中に入った。仁安元(1166)年に焼失。 | 『山崎記』保元4年3月5日条、<br>『百練抄』平治元年7月16日条、<br>『清原殿抄』 | 提要232p |
| 13302 | 東三条院(東三条殿)  | 邸宅       | 摂関家                             | b       | 摂関               | (同上)  |   | 提要232p |
| 13303 | 高松殿         | 邸宅       | 藤原頼隆(真如尼)一鳥羽院一後白河天皇一三条天皇中宮嫡子内親王 | a       | 権中納言             | 保元の乱時、後白河天皇方の拠点となる。乱後、一時期二条天皇中宮嫡子内親王の御所となるが、平治元年に焼亡。空地となる。  | 『山崎記』保元4年3月5日条、<br>『百練抄』平治元年7月16日条、<br>『清原殿抄』 | 提要232p |
| 13304 | 藤原頼隆邸       | 邸宅       | 藤原頼隆                            | c       | 権中納言             | 東宮体仁親王(近衛)や兼盛上皇の御所としても利用された。この邸宅は頼朝子孫が伝領。   | 『世紀』康治元年2月10日条、<br>『台記』同2年9月29日条              | 提要232p |
| 13305 | 源実明母        | 邸宅       | 源実明                             | c       | 少納言母             |   | 『中右記』元永元年1月27日条                               | 提要233p |
| 13306 | 不明          | 邸宅       | 不明                              | c       | 少納言母             |   |   |        |
| 13307 | 鞠院          | 邸宅       | 関白藤原師実一忠実                       | b       | 摂関               | 忠実のころ八町を呑む南北二町に拡大。大治5年源義親を名乗る人物が乱したのもこの邸宅。太部焼亡で焼失。  | 『百練抄』大治5年11月12日条                              | 提要232p |
| 13308 | 鞠院          | 邸宅       | 関白藤原師実一忠実                       | b       | 摂関               | (同上)  | 『百練抄』大治5年11月12日条                              | 提要232p |
| 13309 | 二条角丸第       | 邸宅       | 白河院・待賢門院一権中納言藤原実能・嫡藤原頼長         | a       | 院・女院<br>権中納言・左大臣 | 角丸二条第は保延元年焼亡。その後同地に平経盛の邸宅が建てられた。  | 『中右記』天永3年8月23日、<br>10月8日条                     | 提要234p |
| 13309 | 平経盛邸        | 邸宅       | 平経盛                             | c       | 参議               | (同上)  | 『晋書録』文治2年2月27日条                               | 提要234p |
| 13310 | 藤原家成邸       | 邸宅       | 藤原家成                            | c       | 中納言              | 大治2年の大火の後、家成がこの地を購入した。  | 『中右記』大治2年12月12日条、<br>『仁和寺所蔵古地図』               | 提要234p |
| 13311 | 高階為清邸       | 邸宅       | 高階為清                            | c       | 備中守              | 応保元年焼失。   | 『山崎記』応保元年7月8日条                                | 提要235p |
| 13312 | 三条西殿(三条室町殿) | 邸宅       | ①白河・鳥羽・待賢門院一上西門院嫡子内親王②後白河院・建春門院 | a       | 院・女院             | 康治2年焼亡。承安2年後白河院御所として新造。   | 『台記』康治2年9月29日条、<br>『玉葉』承安2年7月21日条             | 提要235p |



(図4) 12世紀の土地利用図(3D)



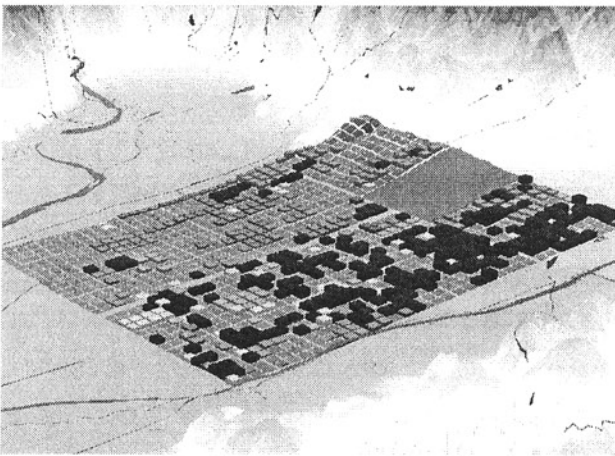
て3D表示したものが図4である。図5の地表起伏は、復元した平安京のDEMを、平安京外部には現地表のDEMを使用している。

なお、当該期における天皇の里内裏や院等の御所は、摂関家や貴族の邸宅を一時的に占有して利用する場合があるので、同一建物といえどもその使用者は時期によって次々と変化する。また、邸宅の相続や貸借などの理由でも使用者は変わる。このような場合、最も身分の高い使用者をもって表示した。例えば、左京A条B坊C町の邸宅が、はじめ一般貴族の邸宅であり、ついで里内裏として利用され、その後、摂関家邸となった場合、C町は「里内裏」として表示している。

また、現在は1町単位に街区ポリゴンを作成しているので、色別も1町単位となる。このため、1町内に複数の土地利用状況が確認された場合、何れか1つに代表させて表示せざるを得ない(邸宅の場合は高位者を優先表示した)。今後、より詳細なデータを表示できるよう、叙上の諸点に関しては、改善しなければならない。

以上の図面から、12世紀平安京の土地利用は、左京に市街地が展開し、右京に農村的な土地利用が卓越する傾向が読み取れる。このスケールにおける12世紀の平安京の土地利用は地形条件と密接に関係しているといえよう。

平安京の地形環境に関する研究から、12世紀における土地利用の立地環境について、次の点が明らかになった。居住地の多くは、地下水涵養量が豊かで、砂礫層から構成される鴨川流域の



(図5) 地形景観復原図上に土地利用図を表示

扇状地帯に立地しているが、荘園や耕地の多くは、細粒の堆積物から構成される紙屋川や御室川流域の扇状地帯、および桂川流域の自然堤防帯の一部にみられる。また、大内裏や役所・諸司厨町は、高燥で、洪水氾濫の影響を受けにくい更新世の段丘面上に設けられることが多い。

このように、平安京の土地利用は、水の得やすい土地に居住地が展開し、砂礫層が少なく耕作が容易な土地に荘園や耕地が展開する傾向にある。さらに、自然災害に対して安全な土地に、宮や役所などの重要な施設が配置されているのがわかる。こうした土地利用と土地条件との関係から、平安京では自然環境を考慮した開発が実施されていたと考えることができよう。

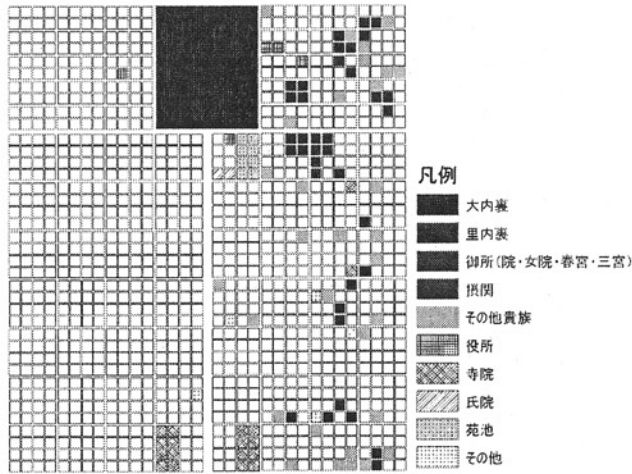
### 3、12世紀京都・貴族社会の研究

#### (1) 古記録の空間情報

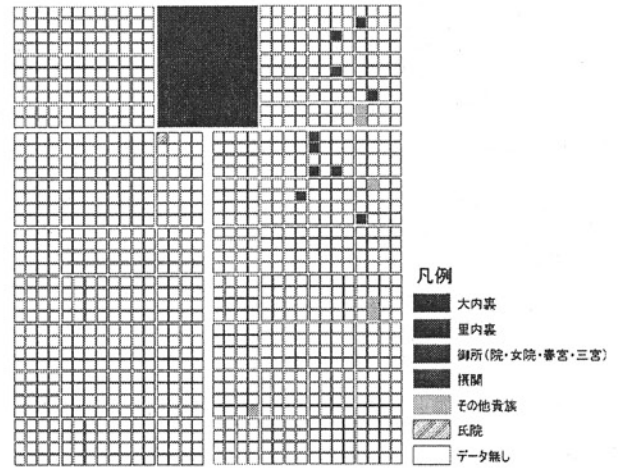
文献・考古遺物・発掘調査・地理学の測量などから得られる膨大な歴史的空間情報を統合して、可能な限り忠実に実在した過去の都市景観を復原する作業は重要である。しかし、同時に注意しなければならないのは、文献に記されている歴史的空間情報は、書き手の主観によって、意識的・無意識的に取捨選択されたものだという点である。つまり古記録などの文献は、それぞれ個性的な歴史的空間情報を有しているといえる。従って、古記録に示されるそれらの情報から、記主自身の空間認識を読み取ることが可能となる。

古記録など個々の記録が有する空間情報や記主の空間認識の問題は、これまで十分な注意が払われてこなかったが、異なる身分・時代・人物の記録データに関する分析の蓄積によって、支配者層における空間認識の時代的変遷や、年齢・身分差・個性などに基づく空間認識の相違点などが解明できると考えられる。

本研究では、『兵範記』データベースをもとに、同記に示された空間情報を図示した(図6)。一方、これと比較するために、同時代に書かれた貴族の日記『台記』を取り上げて、同記からも空間情報を抽出してみた(図7)。『台記』は摂関家出身で強烈な個性をもった左大臣藤原頼長(ふじわらのよ



(図6)『兵範記』の空間情報



(図7)『台記』の空間情報

りなが、1120-1156)が書き残した日記である。

両者に共通しているのは、右京に関する情報がほとんど書かれていない点である。右京は遷都以前からの自然集落が取り込まれ、都城未完のまま田園が広がり、一般庶民の居住地として利用されていたと思われるが、支配階層たる貴族にとって、右京は空間認識の対象外となっていた事実を、これらの図は如実に示しているといえよう。

一方、相違点もある。『兵範記』は左京内の諸地域の情報を比較的満遍なく記述し、里内裏、院・女院・春宮御所や摂関家関係者邸宅が頻出するほか、大臣クラスや頭弁をはじめとする弁官・蔵人・少納言などの実務官僚クラスの邸宅が頻出する。『兵範記』データベースによると、職事弁官たる信範が、天皇・院・摂関の間の連絡調整を行い、行政案件の諮問のために大臣邸を訪問したことがわかる。また、同僚との公的・私的交流が頻繁に行われたから実務官僚邸に関する記録が沢山残されたと考えられる。

これに対し、『台記』は空間情報量が比較的小さい。同記の空間情報は収集作業途上のため、今後、多少の追加が見込まれるが、概ね里内裏・院御所・摂関家邸宅にほぼ限られている点が特徴的である。例外的に記されているのは学館院であるが、これは旧儀・古事復興を宗とし学問を愛する頼長が、橘氏是定に補任されたのを機に、橘氏氏院である学館院の復興を試みた事情により記されたのである。

これまでの調査から、空間認識は記主の身分・

職掌・思想・個性などが反映されており、同時代の記録でも、個々の記録が持っている空間情報には大きな隔りがあることが明らかになった。今後、摂関家(最上級貴族)九条兼実の『玉葉』、下級実務官人に属する少外記清原重憲や神祇伯頭広王の日記を比較検討することによって、身分・階層差による情報の質・量の違い、思想や行動様式の差異などを追求していきたい。また、院政期における重要地区である白河・鳥羽・六波羅など周辺地域の歴史地図の作製にも取りかかり、包括的な検討を行い、古記録のもつ空間情報の特色をより深く検討していく予定である。

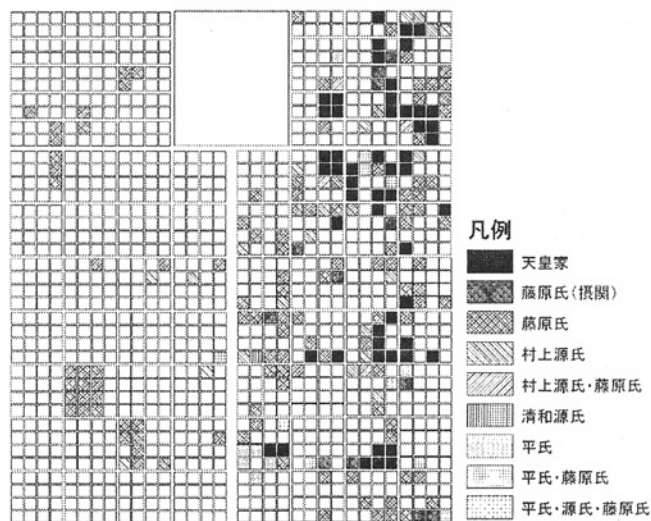
## (2) 12世紀京都・貴族社会の研究

図8は、12世紀の土地利用図の邸宅データをもとに、氏別分布を示したものである。現在は、主に氏レベルで表示しているが、家系別のより詳細な分類や表示方法などを今後改善したい。

すでに明らかにされている通り、平氏政権下の一時期、八条殿に里内裏が置かれたことを除くと、里内裏の所在は、六条以北に限定されていることがわかる。さらに図から、その中でも二条大路と東洞院大路沿いに里内裏や天皇家の御所が集中している事実が判明する。これは、行幸などの行列が通る路として、二条・七条・東洞院などの特定の大路が多用されるという指摘と関連すると考えられる。

都において、天皇や院をはじめとする支配者層の居所や、彼らが利用する経路が、如何なる基準

に基づいて選定されていたのかという問題は、様々に議論されているが、明確な答えは得られていない。地相などの地理的条件や政治的イデオロギーなど多様な要素が関連していると予想されるが、身分や系譜・家系に基づく邸宅の所在状況を詳細に検討する作業や、天皇の行幸・院の御幸をはじめ、朝廷儀式、政務、祭礼など用途別、身分別に利用された路を、GISを用いた道路ネットワーク上で調査し、さらに利用頻度の計測作業を積み重ねることによって、傾向や特色の理解が得られると予想される。この様な視角から、GIS地図を利用した貴族社会の構造に関する検討も今後進めていきたい。



(図8) 氏別分布

\* 藤原氏は、摂関家を除く。

\*\* 併記(例:平氏・藤原氏)は、本図が対象とする12世紀使用されたことを示している。

### (3) 歴史都市京都と古記録の情報

現在の京都には、歴史的建造物あるいは歴史的な事件があったことを示す石標などが存在する。千年以上もの間、日本の首都であった京都は、町全体が歴史的な空間だといえる。例えば、本研究が対象としている『兵範記』の記主平信範の邸宅は、今日は跡形もないが、彼の日記から左京七条三坊十六町西北部(現京都市下京区仏具屋町・北町付近)に存在していたことがわかる。この様な

復元作業を経て、町全体を歴史博物館にみたとしようとする事業は、京都市歴史資料館を中心とするフィールド・ミュージアム構想viとして進められている。かかる視点は京都研究を進める上で極めて重要であり、本研究とも相互に寄与するところがある。

こうした認識から、本研究は12世紀京都の歴史地図上の重要な地点に関する歴史解説や現地状況を示す写真データを添付した解説シートを作成し、古記録が発信する歴史的空間情報と現在の京都とを密接に関連づけることによって、GIS歴史地図を完成し、広く利用の便に供したいと意図している。解説シートは、これまでに上・中京区を作成したが、次年度以降、さらに地域を拡張して作業を進めていく予定である。

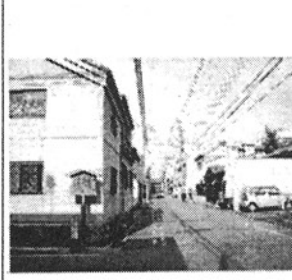
## おわりに

本研究で取り組んだデータベースおよびGIS歴史地図と、これを有効に結合するシステム(京都学デジタル図書館)の構築は、いずれも作成途上であり、多くの課題が残されている。

今後は、白河・鳥羽・六波羅など京外を加えた歴史地図を完成させるとともに、データベースの精緻化や本文中に記した問題点の改善に努める。さらに、対象時期や地域を拡大する点も視野に入れ、GIS歴史地図と京都・貴族社会の研究における活用方法を開拓したい。

また今後、このGIS歴史地図と古記録データベースが、12世紀京都の都市空間などの研究において基礎データとして利用されるよう希求し、最終的には、『兵範記』データベースと京都歴史地図をWeb上で公開する予定である。

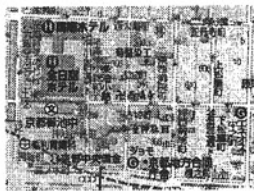
## 東三条殿 (ひがしさんじょうどの)



中京区押小路通釜座西北角

左京三条三坊一・二町

東三条殿は、藤原良房(804~72)により創設された邸宅で、代々摂関家が伝領した。はじめ敷地は三条三坊の一町のみだったが、藤原兼家(929~90)の時、南側の二町に東三条南院が設けられ、2町にわたる大邸宅となった。道長の時代には一条天皇・三条天皇の里内裏としても利用された。院政期には氏長者が伝領し、藤原氏の本邸として大饗、立后、立太子など重要な儀式を行う儀礼的な行事の場としての性格を強めた。保元の乱(1156)では、入道前太政大臣藤原忠実・左大臣藤原頼長父子の所領が謀反の嫌で没官されたが、当時藤原氏長者として頼長が東三条殿を管領していたため、後白河天皇方に接収された。乱後、忠通が氏長者に就任すると彼の手を輔した。仁安元(1166)年に焼失して以後、再建されることはなかった。



リンク  
GIS歴史地図  
古記録データベース

### 解説シート

#### 【参考文献】

- i 上横手雅敬「解説」(『陽明叢書16人車記4』、思文閣出版、1987)、同「兵範記と平信範」(京都大学総合博物館図録『日記が開く歴史の扉』、2003)。杉橋隆夫「『人車記』とその周辺」(陽明叢書記録文書篇第5輯『月報』13、1986)。
- ii 前田亮・佐古愛己・杉橋隆夫「京都学デジタル図書館の構築と多言語情報アクセス」(情報処理学会『人文科学とコンピュータシンポジウム論文集』Vol.1、No. 21、2003)。
- iii 河角龍典「平安京における地形環境変化と都市的土地利用の変遷」(日本文化財学会『考古学と自然科学』42、2001)。河角龍典・佐古愛己「地理情報システムを用いた平安京の景観復原」(2004年度人文地理学会大会研究発表、人文地理学会、仏教大学、2004年11月14日)。佐古愛己・河角龍典・前田亮・杉橋隆夫「古記録データベースと歴史的空間情報のGIS化」(『人文科学とコンピュータシンポジウム論文集』Vol.2004、NO.17、2004)。
- iv 古代学協会・古代学研究所編『平安京提要』(角川書店、1994)。
- v 平凡社地方資料センター編『日本歴史地名大系 第27巻京都市の地名』(平凡社、1993)。
- vi 京都市歴史資料館編集「テーマ展 京都市の史跡と石標—フィールド・ミュージアムの調査から—」(平成17年3月4日~5月29日同館開催の展示パンフレット、2005)。